

明日の日本のために 平成23年5月8日

資料提供 岡山県議会議員 波多 洋治

メルマガ「蘇れ美しい日本」より

◎奥山篤信 全く能天気な米国追随保守派たち！

今回の関東東北大地震で、どの国が日本に対して実質良くやってくれたかと言うと、当然アメリカであることは間違いない。そして米国の政治家、官僚たちも役職を離れた人間としての衷心からなる哀悼の気持ちを表してくれた感動的な場面は数々あることにはある。

しかしこの事と米国の支援の陰にある、打算や謀略を疑いもなく受け入れるというのは日本の政治家やリーダー達が取る態度ではない。

こんな中で本日産経コラム正論の田久保氏の論評には、自衛隊の地位向上（この言葉にはもろ手を挙げて賛成である）の議論かとミスリーディングな題目の下に、何かアメリカにすぎる様な、アメリカに頼る以外は日本が存在しないような卑屈な保守主義を感じたのは僕だけだろうか！田久保氏は日英同盟まで出して、陸奥の正論を引用しているが（陸奥の議論はそれ自体は正しい）、日英同盟の際の英国を引きとめるどれだけ努力したかを書いている。日英同盟が終了したのはアメリカの英国に対する働きかけであり、この点をどういうわけか田久保氏は避けている。この教訓はすぎるような態度ではなく、冷徹にギヴアンドテイクの法則を見極め、現在の日米同盟なるものは（鳩山や小沢の発言が日米関係に影響を与えるはずもなく、アメリカは自国の国益だけに基いて日米同盟を考えているのであって、この点を田久保氏はアメリカを怒らさないようになど卑屈な心が見えているのである。つまり現実主義者は本質を見極めず短いレンジでの日米友好乾杯！でしかない。）結局アメリカとシナの結託による共同管理国たる日本というシナリオに向かってあゆみつつある長いレンジの危機なかで、いかに日本の安全保障を根本から考えるのが先であって、集团的自衛権がそれを推進すると考えるのはまさに甘えに過ぎない。日本がアメリカの利益のために軍隊を、その戦争の是非を問わず派遣できるわけがない。対等な日米同盟などそもそも軍隊をあたりまえの形で使えない日本には資格がないのである。米・シナ同盟のシナリオの中でシナが日英同盟のときと同じようにアメリカに日米同盟を切るように裏交渉するであろう。アメリカはシナに日本を高く売るためにその下ごしらえをしていると見てよいのだ。

今回アメリカが日本を物理的に援助するにあたって、現実的に菅政府は何をコミットしたのだろうか？亡国のTPPであろうか、沖縄基地問題であろうか？アメリカには表面上の慈愛に満ちた態度の裏に、まさに復興支援のいう美名のもとに第二次日本占領政策を目論んでいると見て間違いない。これは日本の経済をとことん解体・破壊し、日本人の精神構造をさらに解体をさせ痴呆化する、マッカーサーの第二弾と考えるべきである。敗戦当

時第三人が日本の焼け野原を跋扈したアナロジーが今後日本全国にその姿を現すであろう。ドサクサに紛れた左翼政権の下、次から次へと新日本人を創り（移民、参政権）やがて歴史的に知的な優良DNAが混合され不良化することは目に見えている。

今日本がやるべきは、まさに近未来のシナの日本支配そしてアメリカの取引としての黙認のなかで、アメリカにすぎるような態度はまさにこの道を助長することはあっても、日本の自主独立のために何ら根本的問題を解決するものではない。丁度バーの雇われマダムがミカジメ料を怖いお兄さんに支払い、他のお兄さんから守って貰うように！

下記田久保氏の論文を転載する。

杏林大学名誉教授・田久保忠衛 不当に低い制服の地位是正せよ

◆米国は同盟の模範演技を見せた

同盟関係はこうあるべきだとの模範演技を米国は示してくれた。誰が命名したか知らないが、「トモダチ作戦」や米兵のワッペン「友」は泣かせるではないか。

海の軍事力の象徴である原子力空母「ロナルド・レーガン」や駆逐艦などが行動を起こしたのは東日本大震災の発生した2日後、自衛隊と呼応して搜索活動、人員、物資の輸送に奮闘してくれた。沖縄の海兵隊が使用不能となった仙台空港をあっという間に修復し、三陸沿岸の孤立した場所に生活物資を運ぶ様子をわれわれは目にした。原発事故対策では、福島第1原子力発電所内部の映像を無人偵察機によって撮影、原子炉に注入する真水も運搬船2隻で供給し、「化学・生物兵器事態対応部隊」(CBIRF)が活動する。

オバマ米大統領が「日米の友情と同盟は揺るぎない」との声明を出したのは、事件発生5時間20分後だった。一段落した後の4月17日に、クリントン米国务長官は日本側関係者と会って、「日米の非常に強い絆を示すために来た」と述べたが、それよりも、宮中のお茶の会に出向いた同長官が御所の玄関先で出迎えられた天皇、皇后両陛下に気付いて感激し、いかにも嬉しいといった表情を示した場面は忘れられない。米議会、それに米国各地で開かれたチャリティなど、米国民が示してくれた善意には頭が下がった。

◆災害に「集団的自衛権行使」

日米関係の法的紐帯は日米安全保障条約である。核心は、いずれかの一方に対する軍事攻撃(第5条)にいかに対処するかどうかだろう。両国とも冷厳な国益の計算に基づいた政略結婚であって、軽はずみな恋愛結婚であるはずはない。ただ、政略結婚を支える信頼関係は同盟を盤石にするために不可欠だと思う。日本が直面した大災害を「共通の敵」と見なし、米国は国を挙げて「集団的自衛権」を行使してくれたと考えたい。

日英同盟には、帝政ロシアの南下政策を阻止しようとの冷静な計算が双方にあった。陸奥宗光は同盟成立の6年前に、「英国は人の憂いを憂いて、これを助けんとするドン・キホーテにはあらず、同盟によりて日本の安全を保すると同時に、英国もまたその安全を保するの担保を日英同盟より得ざるべからず。もしこの担保を与うる能わずとせんや、英国は決して同盟の与国にあらざるなり」と述べている。

当時の英国は、二次にわたるボア戦争、ドイツとの対立、ベネズエラをめぐる米国との緊張の下で、ロシアの南下が中国における自国の権益を犯すのではないかと恐れていた。

日英同盟は両国の必要性があって結ばれたものだが、日本側は日露戦争で勝利を得た後にもどれだけ同盟を尊重し、英国の信用を得ようと努力したか。だが、国際情勢は日英両国にとり次第にロシアを「共通の敵」としなくなり、日米関係は対立の方向を辿ってしまった。同盟はワシントン会議で19年の歴史を終える。後の日本はさらに米英両国と対立、結局、先の大戦の結末を迎えてしまった。

◆民主党政権は同盟に定見なし

日米同盟は、朝鮮半島、中国、ロシアなどユーラシア大陸を展望すると、まだ若い。が、これからどうするかになると、日本の新聞の論調は、「この試練は、日米同盟をより強固にする機会でもある」、「日米協力の成果を同盟の一層の強化につなげる道筋をつけてほしい」といった、いい加減な内容から一歩も出ていない。

民主党政権は日米同盟について定見を持っていないと断言する。同党の小沢一郎、鳩山由紀夫両氏はついこの間まで日米中3カ国は正三角形の関係にすべきだと言っていた。小沢氏の主導で、日本の海上自衛隊はインド洋の給油活動を止めて、完全に引き揚げてしまった。鳩山氏は普天間飛行場の移設先を「県外または国外」と口走り、日米関係を台無しにした。菅直人首相はその時の「副総理」だったはずだ。自民党も罪は深い。集団的自衛権行使実現の一手手前まで行きながら、決断できなかったのは、麻生太郎首相だった。

日米関係の強化には、日本からの信頼関係強化の努力が必要で、それには国柄を変えるほかない。今回の災害をめぐる識者の諸発言の中で、ハッと思ったのは、台湾の李登輝元総統による「首相がリーダーシップを発揮するには、自衛隊の統合幕僚長と官房長官を従え、ヘリコプターから降りて災害地を一つ一つ見回るべきだ」との発言だ。制服と背広のトップを国民から選ばれた指導者が統率するという、民主主義国におけるシビリアン・コントロールの基本の型だ。戦後の政治家が当然のこととしていた制服の現在の地位は、他の民主主義国に比べて不当に低い。この是正こそが新しい日米関係の第一歩ではないか。

「強い日本」と「強い米国」の不変の同盟が世界の平和と安定に役立つ。これこそ、アーミテージ元米国務副長官ら共和、民主両党の論客が11年前の報告の中で行った提言である。(たくぼ ただえ)

◎西村真悟

「昭和の日に思う」

本日、早朝、門に日の丸を掲げた。

思えば、振り返れば振り返るほど、ますます昭和天皇と伴にあった昭和の日々は、日本の国体が世界史に燦然と輝く時代であったと思う。

これは、明治天皇との日々とはまた違う意味で輝いているのである。

明治天皇の御代は、我が国が開国して、直ちに世界史に参加して勇戦敢闘し、遂に維新から三十八年後、ロシアを打ち破り世界の強国に登った時代だった。

昭和天皇の御代は、明治に登った世界列強の一員として苦闘し、遂に欧米列強を相手に大戦争を敢行して敗北するも、太陽の如く再び大国に登った時代である。

明治、大正、昭和と続く時代の中で、我が国運は、急上昇し、苦闘し、墜落し、また急上昇した。

そして、この上向き下向きのいずれの波の中においても、

日本国民は天皇とともにあった。

明治が、天皇とともに近代化という坂を急上昇しえたことは、もちろん輝かしいことであるが、新興国が明君を擁して急上昇して世界史に登場する一つの例として世界史の中で、他にも見いださうることである。

しかし、昭和は、他には見いだせない。

徹底的敗戦を喫した民族が、勝者から徹底的に悪と貶められても、当然の如く同じ君主を擁して、その敗戦の傷手から立ち上がり再び大国へと急速に回復することは世界史において、唯、我が国の昭和にだけに見いだせることである。

世界史においては、徹底的敗戦時の君主は、国内に留まって民衆に殺されるか国外に亡命するか、その二つに一つしか見いだせない。

では、昭和天皇の時代は、何故この世界史に唯一のことと成りえたのか。

それは、天皇が「権威」だからである。

日本を断罪する勝者の復讐劇だった東京裁判の裁判長ウェップは、裁判後かなり経ってから、「日本の天皇とは何ですか」と本国で質問を受けた。彼は、答えた。

「神だ。あれほどの試練を受けても国民の信頼を失わないのは神だ」

昭和二十年九月に、我が国に進駐した連合軍は、直ちに我が国の言論を徹底的に検閲したうえで、「真相はこうだ」という日本を悪者とするプロパガンダをNHKを通じて国民に刷り込み、国民をして戦争中及び戦争前の我が国家のあり方を「悪」とみなして、その指導部を恨むよう誘導した。

また、ソビエトのスターリンや中共の指導部は、天皇の存在を否定して共産主義を信奉するよう日本軍捕虜を洗脳し、その洗脳教育優等生となった捕虜から率先して祖国日本を「赤化」する使命を与えて帰国させていた。

このような国内状況の中で、昭和天皇は昭和二十一年から被災した国民を励ますために、全国行幸を開始された。それも、厳重な警備はおつけにならず、宿舎も学校の講堂に布団を敷いて休まれるという行幸を続けられたのだ。

そして、国民は、その天皇のお姿を拝して、元気付き、万歳を歓呼して歓迎し、復興へ

邁進した。

この行幸の御様子は、「天皇様が泣いてござった」という本に詳しい。この本の中で、ソ連から帰ってきた元兵士が、佐賀に行幸された天皇に文句を言おうと待ちかまえていたが、天皇が近くに來られたとき、自分の考えが誤っていたと泣きはじめた様子が書かれている。

敗戦直後の日本国民は、身近に行幸された昭和天皇をありがたくお迎えして勇気づけられた。

この様子は、我々日本人には自然である。

しかし、日本を占領していた連合軍には異様な光景、あり得ない光景に見えた。ウェブのように「神」としか表現できない神秘的力と思えたのかも知れない。

そして、彼らには、この天皇と国民との絆が、日本の脅威そのものに見えた。

従って、彼ら占領軍は、日本を弱体化するために「大日本帝国憲法」を否定した「日本国憲法」を制定したのである。

この「日本国憲法」は、徹底的な国民主権と民主主義と自由と平等と個人主義の人権思想を特徴とする。

従って、GHQ（占領軍総司令部）という「日本国憲法制定者」は、国民主権と自由と平等の思想から、日本における天皇の存在をいずれ否定されるべきものとしたのである。フランスが、自由平等博愛という理念の元でルイ十六世の首を切ったように。

GHQ！何という悪意に満ちた奴らであろうか！

ところが、各地を行幸される天皇への国民の態度は、「日本国憲法」施行（昭和二十二年五月三日）後も変わらなかった。

異国人が一片の紙に「憲法」を書いたことくらいで、天皇と国民の二千数百年にわたる「皇（すべろぎ）との絆」という我が国の根本規範は何ら変わらなかったのである。

昭和天皇は、敗戦の焼け野が原において、御一身を以て、天皇と国民との「皇との絆」がかわらないことを世界にお示しになられた類い希な名君であらせられる。

そして今、今上陛下は、この度の三月十一日、東日本大震災に際し、十六日にお言葉を発せられて国民を讃えまた励まされ、この連休の前後に、皇后陛下と伴に根こそぎ破壊された被災地の国民を激励に廻られている。

被災地の国民は、昭和天皇の行幸の折りと同じようにありがたく両陛下をお迎えし励まされ、心から喜んでいる。

「皇との絆」は、今も何もかわっていないのである。

この度も天皇のかけがえのない御存在が被災者と全国民の前に現れた。危機、国難において、何時も現れる天皇と国民とのかわらぬ絆を思うとき、明治天皇の次の日露戦争時の御製を思い出す。

敷島の 大和心の 雄々しさは
ことある時そ 現れにける

よって、昭和の日に改めて思う。

我が国の真の根本規範は、明文のない太古から、何らかわっていないと。即ち、権力のことではなく、権威のことであるから、かわらないのである。

これを言葉で表せば、大日本帝国憲法第一条から第三条に言うところのものである。

「大日本帝国は、万世一系の天皇これを統治す」

「皇位は皇室典範の定むる所に依り皇男子孫之を継承す」

「天皇は、神聖にして侵すべからず」

なお、本日の昭和の日に一日先立つ昨日四月二十八日は、敗戦により軍事占領された我が国の独立を定めたサンフランシスコ講和条約発効の日である。本年は、発効から五十九年の年である。

この日を「主権回復記念日」として祝う集会在、井尻千男さんを代表世話人として靖国神社境内の靖国会館で開会された。本年は、十五回目の開会になる。

この集會に招かれたので上京し、靖国会館で登壇までの間、主催者側の挨拶の後、自民党議員の話聞いていた。

そして、この国難のなかにおける、自民党の危機感の無さに驚いた。彼らは村山富市談話を信奉するGHQが造った戦後の申し子である谷垣総裁で、まだいけると思っている。

これでは、菅総理の仕掛ける自社さきがけ時代への回帰、つまり大連立という戦後政治の延命策に気が移り、世論調査で（たった）9%の支持で首相にしたい人のトップになった理念無き小沢一郎的政治手法に翻弄され、そこになだれ込みかねない。

事実、昨日、自民党の幹部としてトップに登壇した自民党〇〇会長は、元小沢一郎氏の「文字通りの側近（姉）」（側室ではない、と思う）であった。

（そういえば、あの姉さん、一緒に酒を飲んでたあの時、ね～え、小沢さーん、過激な西村さんを注意してよ～、と言っていたなー）、と思っだしていたら名を呼ばれた。

そこで、登壇したとき、これだけは言わねばならないと思ったことを言った。即ち、「日本国憲法」の無効を確認せずして我が国の「主権回復」はない。「日本国憲法」は我が国を「主権を持つ国家」とはしていないからである。

「大日本帝国憲法」の定める天皇大権の自覚無き「主権国家」はありえない。

厳しい内外の情勢に対処するため、今こそ、その大権を行使するときである。

即ち、軍の編成大権、軍の統帥大権、そして、戒厳大権。